

---

# BAD BoyZ バドボーイズ

林辰子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

B A D B o y z バドボーイズ

### 【Nコード】

N O 7 6 0 B A

### 【作者名】

林辰子

### 【あらすじ】

親友との幼い頃からの夢、甲子園を目指して野球強豪校に入学した伊藤由輝（いとう ゆうき）だが、ある事情から野球部を辞めることとなった。

失望感と親友を裏切った責任感に苦しみ、スポーツ推薦が故に、学校に居にくくなってしまふ。

が、あるきっかけにより出会ったバドミントンにより、彼の人生に光が戻る！！

人間関係、勉強、青春に悩み葛藤しながら最強のバドミントンプレ

イヤーを目指す二年間のスポ根小説

……の予定^^^；

5月上旬（前書き）

私の偉大なる先輩方をモデルにさせていただきました。

まだまだ初心者ですが、お手柔らかに（笑）

5月上旬

ザアアア...

今、オレは

「何言ってるんだよ」

「辞めたんだ」

学校の帰り道、ドシャ降りなのに傘も差さず

いとつよじき  
伊藤由輝と

あかはねしょうま  
赤羽翔真は立っていた。

伊藤由輝は、口を開け

何とか酸素を吸い込み

言葉を発した

「野球部辞めたんだ」

声がかすれてしまった。

あつ…と少し表情が緩みかけたが、伊藤由輝はすぐに元の表情に戻った

それとは逆に、赤羽翔真は顔を歪めた。

「何で…辞めたんだよ」

伊藤はどこを見ていいか分からなくなった。

「何で辞めたんだよ?! 何でお前…」

さっきまで失望感にあふれていた赤羽の声に、怒気が込められる。

「しっ…ここは住宅街なんだぞっ…」

…なんて言える立場じゃないけど

伊藤はそう思いながらも目を合わさずに言った。

「うつせー、何でだ!」

声のボリユームとしては、明らかに赤羽の方がうるさいレベルに達していたが…

「何だっていいだろ…もう…辞めたんだから」

伊藤は、無機質な笑いを浮かべてみた。

それが、赤羽のカンに障る

「ふざけんじゃねえよ?! お前、まさかあのことを忘れたんじゃ……」

「……………」



「何か言えよ!!」

「……………」

雨は降り止まず、二人に降り続ける。  
ドシヤ降りの勢いは増すばかりだ。

「……………」

「……………」  
「悪い」

先に口を開いたのは伊藤の方だった。

「悪いって…おま」

赤羽は再び顔を歪める。

そして、唇をきゅっと結んでから言った。

「一緒に甲子園行くって言ったじゃねえか！！  
だからこの高校入って…」

「ごめん！」

伊藤は、赤羽を無理矢理さえぎって叫ぶように言った。

それと同時に、困惑しはじめた赤羽の目の前で頭を下げた。

雨はずっと降り注ぐ。

涙が出そうになった

「伊藤っ……」

伊藤は、

「もう駄目なんだよ」

そう吐き捨てた

言ってしまった。

そして、走り去った。

「おい……!」

ただひたすらに走った。

高校に入学して早一ヶ月、新しい制服はもう取り返しがつかないくらいに濡れ、ぐしゃぐしゃだったが、構わずに水溜まりの上を走り抜けた。

「う…わあああっ！」

泣いた

「くっそおおおお…!!!!ごめん、赤羽え…本当に、ごめん…!!」

今、オレは

今、オレ伊藤由輝は

親友を裏切った

ごめん、ほんと、ごめん

言ってもダメだよな、許せないよな

オレも多分、同じ事されたら許せない

でも、ほんとごめん

許さなくてもいい、  
ほんと悪いと思ってる

約束忘れた訳じゃないんだ  
約束破ってごめんな

ごめんな、赤羽。

「……………」

翌日、伊藤由輝は一睡も出来ずに学校に登校した。

私立長野新制大学附属高等学校

本部が東京都千代田区にある、新制大学の附属校で、中学、高校がある。

四年後には小学校も出来、県内初の小中高一貫教育が実現する。

県下有数の注目校だ。

野球・陸上・バレーボール・水泳・硬式テニスが強く、  
野球においては昨年度、地区大会ベスト4まで残った。

伊藤由輝は、この新制高校に野球のスポーツ推薦で入学した。学校に野球の才能を買われたのだ。わざわざ電車で1時間近くかけ、ド田舎の山奥から、まだ建物の多い市内まで通って来ている。

野球は気がついたら始めていた。

気がついたら生活の一部になっていた。

なのに、辞めた。

「……はあ」

伊藤由輝は、虚ろな目だった。

「伊藤どうした??」

「え、あ?」

今、クラスで一番仲の良い沢木寛都さわきひろとが顔を覗き込んできた。

伊藤は一瞬固まり、ニカッと笑って見せた

「っだよ、何でもねーし別に!!腹減ったからテンション下がんだよ」

伊藤は思い出したようにカバンに手を突っ込んだ

「パンいる??」

カバンから引っこ抜いた手には、六枚切りの食パンが袋ごと握られていた。

「ぶっ」

沢木は思わず吹いた



「いいや、いらない。つか…すっげ笑顔つける」

「えーそう??」

伊藤はパンをカバンにしまった

内心ほっとした。沢木には悟られなかったようだ

「ってしまうのかよ、それネタか」

沢木は肩を揺らして笑った

「いや、ネタじゃない  
マジで食おうと思った」

「まだ8時過ぎたところろー」

「だからあえての早弁ってヤツ??」

「もーすぐ高校総体なんだー。」

「シカトかよ」

伊藤は顔を歪めた。沢木はへらへらしている。

こういう、とんとん話を進める癖に急に話題を切り替える沢木がどうも憎めなくて好きだと伊藤は思った。

「オレバド部なんだけどさー」

「あー、そーいやそうだったなー??」

沢木は打つ振りをしながら話を進めた。

「来週大会だから休むわけ!!オレ出ないけど。だから授業ノート頼むよ」

「……………」

伊藤は目が点と化した。

「え、ダメ??」

「勉強はオレに頼むな」

自分でも驚くほど淡々と言った。

「お前その…バカなの??」

沢木は少し気を使ったようだが、「バカ」という言葉が全て破壊し尽くした。

「この学年で恐らく一番」

「え、だって推薦だろ??しかもこの学校の偏差値55だよ??んなわけー」

「それは何かの間違いだ」

伊藤は無表情に言った。それがかえってリアリティーを増させる

「実は頭いいパターンなんだろう??」

沢木はひたすら食い下がる。よくわからないが、伊藤はおかしくな  
って笑ってしまった。

「野球部なんてさーだいたいみんなバカばっかなんだから…」

あっ

今オレ

野球部って言った…

…別に気にするような内容ではない。

野球をしていたのは事実だし、野球部だったのも事実だ。

「…オレもバド部入ろうかなー」

伊藤は思ったことを揉み消そうと言ってみた。

「野球辞めんの？野球部多いから、辞めたら何か肩身狭くねー？？」

肩身…か…

沢木は悪気はない。が、今の伊藤には辛い言葉だ。

少しずつ、朝練から上がって教室に入って来た野球部が伊藤を見た。沢木の言っていたことを聞いていたらしく、伊藤を見つつ何か話している。

「……………」

「そーいやお前、朝練は？サボったの？サボったら殺されんじやないの？」

「あっははは」

伊藤は笑いたい訳でも無かったが、笑った

「殺されるな」

野球部だったらな…

「伊藤」

「あ？」

廊下から、他クラスの野球部が覗き込んでいる。

「伊藤集合」

伊藤は一瞬沢木を見た

「わり……」

「いいよ行つていいよ」

## 5月上旬続き（前書き）

まだまだ実力が伴いません、すいません。  
伊藤のキャラがぶれている…

## 5月上旬続き

伊藤は重い足取りで廊下に向かった。  
心なしか、赤羽がいた気がする。

「……うす」

廊下には、やはり赤羽が居た。ほかに、こはやしつるぎにいむらりようた小林剣や新村涼太他：

一年八組の前は、  
ボウズ頭の人口密度が高まっていた。

赤羽以外に居る六人ほどは、全くの無表情だが、赤羽は汚い物でも  
見ているかのような  
何とも言えぬ気持ちだった。

一年生の主将である、新村が周りに目配せをして、口を開いた。

「伊藤、お前部辞めたの？」

新村の大きな目にじろりと見られ、伊藤は思わず目を反らした。

「…ああ」



「何で」

「えっ……」

伊藤が反応することに、赤羽の表情が険しくなる。

「あの・アレだ、勉強！さすがに野球ばっかっつーのもマズイかな  
ーってさ？」

…はは、さすがに苦しい言い訳だ

伊藤の周りの野球部が顔を見合わせた

「……はあ？」

「伊藤お前一般入試で入学したのか？？」

「や、違うけど……」

「何が……」

赤羽がやっと口を開いた。

「何が勉強だよ」

「!!」

空気が緊張感を持ちはじめた

「オレたちは……」

進路も！体力も！時間も！青春の全てを投げ捨てて  
野球にかけてこの学校に来たんだよ！！勉強なんてしてる暇ねーん  
だよ！！」

伊藤は、赤羽の目が一瞬潤んでいるように思った。

「……………」

学生として、勉強が時間の無駄だと言いつのはいかなものか。  
だが、赤羽の言っていることは、その空間に居る誰にも正しく思わ  
せた。

「……………」

ここにいる誰もがそれを思っている。  
それを思っていた者もいる。

「オレ知ってんだからな、お前が辞めた理由」

「は?!」

伊藤は思わず、赤羽の方を向いた。その時赤羽は睨みつけていた。

「お前は野球を侮辱している。それだけはよく分かったぜ…」

「……………」

「あんな“クソみたいなとんでもなくしょうもない理由”で辞める  
なんてな!!」

赤羽が言つと、廊下がざわついた。

「おい、言い過ぎだ」

まずいと感じた野球部員が止めかけたが、赤羽は止めなかった

「こいつにはこれ位言つて当然の罪なんだよッ!!」

「罪だつて…赤羽やばくね」

新村は周囲をちらつと見回した。

「あー、とりあえず

マジで辞めたのかどうか確認取りたかった。  
退部届出したんだよね??」

「あ……うん。」

確認取るだけなら一人で来いよ…

「あと、先輩達に挨拶言つとけよ」

「ああ、わかった」

「全員な」

「全員?!」

伊藤は少し青ざめた

「たりめえだろ」

「全員…ってなっ…七十人…  
ああ、わかった」

新村達は、用が済んだので帰ろうとした

「…がんばれよ」

伊藤はボソツと言った

「ああ、そっちもな。」

赤羽は、一瞬伊藤を見て、去って行った。  
他の野球部員も去る。

頑張っ…オレは何を頑張ればいいんだろな。

くくくくくくく

「は？お前辞めたの」

哀れみ

「え？ああ」

他責的

「何？ああそうですか」

利己的

「お前誰だっけ？？」

上下関係

「あーはいはい。頑張って甲子園行ってきたーす」

そして実力社会

伊藤由輝は頭を下げた。

「短い間ですが、お世話になりました。」

「……はいよ」

伊藤は、約二日かけて七十三人の上級生と監督・コーチ・顧問の所をまわった。

寛容な者は誰も居なかった気がした。

「……………」

ただ喪失感

後悔なんてしていない

…はずだ

覚悟は決めた

……はずだ

オレはまだ

野球をしたいのか？

「……………」

一日6時間の授業を終えて、部活動に所属しないものは7時間目に自主学習を行う。

それが長野新制大学付属高等学校のカリキュラムだ。



伊藤由輝も、シャープンをもって机に向かってはいた。  
大嫌いな数学の問題集を広げてはいた。

耳に入るのは遠く、

グラウンドから聞こえてくる野球部の掛け声だけである。

グラ整して、先輩と監督の道具出して、ストレッチしたら全員でラ  
ンニング、グラウンドダッシュ…

頭の中に正確に出てくる練習メニュー

自分も先週まではあそこにいたんだ。

…こんなふうに聞こえるんだ。

「…!!」

オレ…後悔している…のか？

辞めたのに？

いまさら何を思って…

窓の外が夕焼けに満ちてきた。  
それとともにチャイムが鳴り響く。

「起立」

ガラガラ…

自主学習をしていた十人程は、立ち上がった

「礼」

「ありがとうございました。」

挨拶と礼をし、そろそろ人が出て行く。

伊藤も、教科書やらを学校指定の使い勝手の悪いカバンに詰め込み、廊下に出た。

放課後の教室棟は静まり返っていた。

日中の活気が嘘のように

ただし、野球部の声は響く。

虚しく聞こえた。

足早に、一年生の教室がある四階から一階までを駆け降った。

伊藤は、自分でも、驚くほど急いでいるんだと思った。

無意識のうちに、自分から遠ざかっているのだろうか。

「うわあっ?!」

「キャアアア?!」

ドサッ

階段を降り終わったところで、影から現れた誰かにぶつかった。

「う...すいま...」

「ご、ごめんなさい!! ケガはない?! すいません、急いでるんで」

タタタタ...

「.....何やってんだオレ」

行ってしまった。

伊藤は立ち上がり、学ランをはらってからカバンを拾い上げた。

……本当は辞めたくなかったよ。

別に、野球が嫌いになったわけじゃない。

野球は今でも大好きだ。

カバンを担ぎ、一年生のロッカールーム（下駄箱）に直行した。

伊藤由輝のロッカー番号は赤の318番。

学年ごとに色分けされており、伊藤の学年は赤だった。

ガチャッ…

ロッカーを開け、上靴を脱ぎ、学校指定の通学用の靴を履く。

上靴をロッカーに詰め込む。

ロッカーに必要な無い教科書も入れる。

始めは教科書と靴を同じ場所にしまうことに抵抗を持ったが、今となつてはそんな抵抗はどこかへ消えた。

こんな何にも無い毎日が、これからのオレの三年間だ。

野球人生は終わり。

せっかく大学の附属校に入ったんだ、附属校推薦とかいうので新制大学に入学して…

普通の会社に入って、普通に結婚して、普通の家庭築いて、普通に老後送って死のう。そうだ、そうしよう。

「おーい」

これがオレの人生設計高一編だ！！よし決まり

「おーい」

「？」

「おーい伊藤！！」

「?!」

## ライバルと新たな決意（前書き）

長くなりました。

時間かかりました。

誤字脱字ハンパないと思います。

疲れました。でも、筆者の思い入れ、下手くそながらも伝わったら嬉しいです。

## ライバルと新たな決意

「おーい伊藤！！」

伊藤は、声のする方を見た。

ロッカールームに内接された、中庭からである。

「沢木！」

中庭と言っても、木が一本植えられているだけで、中学棟と高校棟の間にある。木が植えてある一角以外は全てコンクリート固めだ。庭とは言い難い。

沢木は通称「ミドリムシ」と言われている一年生のジャージを身に纏い、

右手にバドミントンのラケットを持ちながら、伊藤に向かって手をぶんぶん振り回している。

「おーい伊藤ー！おー…」

ガシッ

伊藤も振り返そうとしたとき、つまり沢木が伊藤に呼びかけた直後、沢木は後ろから頭を掴まれた。



沢木の顔は青ざめている。

「てめーバドなめとんのかアアア！！テニス出身だからってチヨーシこいてんじゃねーぞオオラアア！！全然ベツモンなんだかなアアアア！！」

先輩とおぼしき人物は、沢木を掴んだ手を上下に揺すった。

「いやあアアアッ？！すいませんでしたッあああうあうあうい？！」

「はは沢木」

伊藤も思わず笑ったが、沢木を叱った先輩を見て、何となく黙り込んだ。

中庭に小さな笑いが起こった。どうやら、沢木たちバドミントン高校始めの一年生は、中庭ですつと素振りをし続けていたようだ。

一年生と思われる男子十五人。（ミドリムシを着ているから）

二年生と思われる男子八人。（カラフルな服を着ているから）

他はおそらく体育館内。

確か、放課後は体育館の取り合いだと伊藤は沢木から聞いた。

『野球部のせいでサッカーの連中はグラウンドから追い出されるし』

『それあ悪かったな』

『野球部のせいで弓道場は野球部の室内練習場にされるし』

『それあ悪かったな』

『野球部のせいで中庭での素振りが学校周辺のランニングに変わるし』

『それあ悪かったな』

う…また気にする必要の無い過去を…

伊藤は思わず首を振った。

少し、沢木たちバド部男子を見ることにした。

一年生の教育もあるだろうが、これだけの数の二年生が外に出されるという事は…  
よほど部内で勝ち抜くことは至難らしい。

野球はチームプレー九人のうち、一人でもいなければ試合が出来ない。

それに対してバドミントン。個人戦もある…か。

伊藤は、靴を完全に履ききっていない状態で中庭へ駆け出した。

「おーし、それじゃ素振り二百ー始めー」

その声とともに、各自が窓ガラスに向かってラケットを振り始める。

己のアラを見つけだし、洗い出すために。

「……………」

時々、二年生が一年生を止め、自分で手本を見せ、間違いを指摘する。

伊藤は何も考えず、ただ見つづけた。

「……………」

何か…懐かしい感覚だ

ザッ…

「！」

伊藤は、自分の横に誰かが立っているのに気がついた。

「先輩基礎打ちしてください」

先…輩？？

伊藤は隣に立っている誰かを見た。

その人物は

ラケットを担ぎ、静かな口調で、まるで女のような顔をしていた。

伊藤よりも、長身で細い。

伊藤のことなど目にも入っていないようだった。

「え？？ああ、分かった。」

沢木を叱った二年生が歩いていった。

「お願いします。」

無愛想に言った。

その青年からは、誰からも性格が悪いと思われてしまうようなオーラが発せられていた。

「……………」

伊藤には目も向けず、その青年と二年生は体育館へ向かう。

「おーい……………」

伊藤はコソコソと、素振りしている沢木の横へ移動した。

「今の誰？」

「え？」

「今二年生連れてった奴」

「あー…あいつね。」

あいつ中高一貫の一組の湯澤匠ゆざわたくみだよ。めっちゃ頭いい上に新制中学のバド部出身！」

沢木は素振りしながら器用に答えた。

「へー…ヤバくね？ライバルじゃん」

伊藤は、沢木の様子を伺いながら言った。

沢木はちよつと不機嫌に答えた。

「何言つてんだよ。」

新制中なんて！オレら公立中学と違って、週一のお遊び部活だしっ」

「へー」

道理で中学の大会で聞いたことないわけだ

「中学の大会でなんて聞いたことも見たこともねーぜ、お遊び部活  
ッ！ー！」

沢木は堂々と言い放った

伊藤は苦笑した

「おー：すごい用」

「ま、あいつなんて抜くけど」

「おっ！ー！」

その一言で、沢木の素振りにより一層力が込められた気がした。

「オレテニス前衛だったし。前衛ってバドと動き同じなんだぜ。」

「へー…やっぱり似てる競技だけあるよ。でもさ、」

伊藤は、ずっと言おうと思っていることを言おうとした。

沢木の動きをまじまじと見る。

「んだよ」

「お前、明らかにテニスしてるみたいな振りだけど。いいの？それ。」

ガチャーン！

「えっ？！ウソお！！」

伊藤が言い切ると同時に、沢木がラケットを落とし叫ぶ。

「おいラケットラケット…みんな見てるし」

「え、どこが？！どんなふうに？！どんな感じに？！」

「え、ちょ落ち着けて」

まー…テニスもバドもやってないオレにも分かるんだから、相当ま  
ずいんじゃないかな。」

沢木が伊藤にすがってきた

「もっと具体的に！！やっぱ年季入ってっからなっ  
なかなか直んねえよ」

「具体的につて…ちょっと離れるよ、あと黙れ。」

ここで言わないと、こいつ黙りそうにないよな…

「うーん、なんつか雰囲気？…いつからやってんの？  
えー…中学？？」

すがりついた沢木が伊藤をがっちりと掴んだ。  
伊藤は思わずたじろぐ。

「五歳！！」

「うわっ…すこ」

「じゃなくてどこら辺？！どこがおかしい？！」

「オレじゃなくてお前のセンパイに聞けよ…ってあああつ！！！！」

伊藤が偶然目にした時計は、5時13分を指していた。



「電車が来る！1時間に一本ペースだから帰る！」

「待つてヨシキくん！待つて、オレを助けてえ」

「お前にはセンパイがいるだろーに！！」

沢木は伊藤を捕まえた。もう素振りどころじゃない。周囲もさすがに呆れ、自分たちのすべきことを始めている。

「あのさ」

「！」

鋭い声で、沢木と伊藤

（八割沢木）の動きは止まった。

声の主は、沢木と伊藤を睨んでいた。

二人は目線を下に落とした。

湯澤とは打って変わり、身長がかなり低い。ラケットを左手に持っていることから、左利きだった。

「部活に関係無い人は邪魔しないでくれるかな？！」

ここにいるのは、君らみたいな真面目じゃない奴ばっかじゃないかなー!!」

伊藤は少し驚いた。

「真面目じゃな…」

沢木は抗議しようとしたが、伊藤が止めた

「ごめん!..!」

伊藤は笑顔で言った。

「もう邪魔しねえよ」

「……………ならいいけど」

伊藤は「離せ沢木」と言っ、沢木を振り払い、  
「じゃあな」と、中庭を後にした。

本当に電車を乗り過すところだったので、伊藤は迷惑をかけたチビサウスポーに感謝した。

ロッカールームを通過し、校門に向かおうとした。

ドンッ！！

「うわ?!」

「てっ!?!」

ドサッ

再び誰かが伊藤とぶつかった。

「今日二回もかよ…ついてねーな」

「わーっ!!ごめんね?!大丈夫?!」

声の主は、地面に膝をついている伊藤に手を差し延べた。

「あ・すいませ…」

伊藤ははっとして顔を上げた

「あ、さっきのコだね…ごめんね、二回も」

「いやっ、大丈夫です」

伊藤はさっと立ち上がり、なぜか姿勢を正した。

さつき階段でぶつかつた人と、同一人物らしかった。

すらりとした、細身のポニーテールの女生徒だった。

シンプルな水色のバドミントンのユニホームを着ている。

「男バド??」

「あ…いや」

「あつ…そか。じゃ、ごめんね、今度は気をつける!」

女生徒は体育館へ走り去った。

「え?! いやちよつとま…」

つて足はや!!

ロッカールームを右に曲がれば校門。  
直進すれば体育館。

何だろっ、何でだろっ

これを逃したら一生会えない気がする。

…ってオレは何を考えて…

ガラ…ラ…

伊藤は体育館の扉を開けた。

って来ちゃったよー！！何やってんだ、オレ！！

ガラ…ラ…キィィ…

って扉締まり悪いなオイ！！

「見学？」

若そうな男が問い掛けてきた。

「ハ・ハイ!!」

「扉ちゃんと閉めろよ」

「ハ・ハイ!!」

ガツ…キイイ…

しかし締めまり悪いな!!

扉を、伊藤の全体重をかけて閉め終わると、若そうな男に「出身部」と言われた。

「あつ、小中野球部です!!あ…と小学校はサッカーも掛け持ちだ

ったような…」

慌てて答えた。

「ふーん…」

（何か否定的だなあ）

バンッ

「！」

伊藤は衝撃音に振り返った。

三年生男子が、コートの端から端を打ち合っている。

「高校総体近いからあんま邪魔すんなよ」

「…はい」

スタタ…

「あ！」

伊藤の前を、さっきの女生徒が通り抜けた。

タタ…

「?!」

それと湯澤匠も通った。

二人はコート内に入った

「お願いします」

…え?!

伊藤は驚いて、何が何だか分からなかった。



二人はジャンケンをして、シャトルを打ち合う。

湯澤はテキトーに女生徒の元まで打つ。

それと同じだけの飛距離を女生徒も出す。

四回ほどラリーを続けた時だった。

「どっち勝ったっけ」

女生徒はしゃがんで、ネットを挟んで湯澤の顔を覗き込んだ

「オレです」

女生徒は、シャトルを渡そうと、ラケットで打とうとした。

「…レシーブで」

女生徒は止まった

「ちえー、分かった」

これは…

「よろしいですか、よろしいですか」

主審を男子部員が始めた。湯澤と女生徒は頷いた。

「ファーストゲームラブオールプレー」

「お願いしますお願いします」

「しあつす…」

女生徒は主審、線審など、四方向に向かって早口をお願いしますを連呼しながら礼をした

湯澤は一礼で済ます。

湯澤とあの人で試合するのか!!

「 IPPON!! 」

「 !! 」

女生徒からのサービスショット。女生徒は吠える。湯澤はラケットを構える。

パンッ

サーブ…高い!!

打たれたサーブは大きく弧を描き、今にも天井につきそうな所で急降下した。

湯澤は少し顔を歪めて、高く相手側バックハンド奥に返した。

「男子のが湯澤。中高一貫でお前と同学年」

若い男が語りはじめた。

「女子のが室我<sup>むろが</sup>。二年生女子の一番手。さっきやつと戻ってきて、湯澤に相手させてる。」

「は・はあ…」

「驚いてたみたいだけど、バドミントンじゃ男子より女子のが強いっていうのはそんなに珍しくない。

まあ、一回コツ掴んだら男子のが伸びるのは早いかな。

男子より強い女子ってのは、相手が女子だと物足りなくなってくる。特に室我みたいなのはな」

伊藤は湯澤と室我の試合に目線を戻した。

（室我さんっていつのか…）

バンッ

「っしゃああッ!!」

室我はポイントを取り、叫ぶ。  
それに対して湯澤はポーカーフェイスだ。

「…声だせよなあブツブツ」

「……」

伊藤は隣の人物がイライラしているのを感じた。

「ポイント1 0（ワンラブ）」

得点した室我のサービスショット。

「イッポン!!」

パンッ

バンッバンッ

長いラリーが続く。

ネット際へ落とすドロップショット

相手側奥に返す速く足の長い返球ドリブンクリアー

室我は前へ落としたり、後ろへ追いやったり、完全に湯澤をもてあそんでいる。

湯澤は、それを全て確実に返している。

これがバドミントン…

オレが想像してたより…全然激しい！！  
パンッ

「っしゃあー！！」

スマッシュを決めた。

「……………」

湯澤は怪訝そうな顔をして、ラケットでシャトルを拾い、相手コート側へ返した。

「ありがとうございます」

室我は受け取り、羽を整える。

「ポイント2 0（ツーラブ）」

伊藤は湯澤を見た。

手で「待て」と相手に伝える。

湯澤は手を下ろし、構えた。

「イッポン！！」

室我は勢いよくラケットを振った。

「！！！！」

湯澤は後ろに下がる

いや、まて湯澤！！

パンツ

「！！！」

すごい！！

放たれたのは、目の前のラインギリギリのショートサーブだった。  
ロングサーブに対し、落ちる速度が明らかに速い。

「…っ！！！」

伊藤は声が出かけた



湯澤は顔を歪めた。

後ろへ行っていた体重を一気に前に持って行き、  
スライディング

シャトルを追いかけ、飛び込んだ。

間に合うのか？！

室我はネット前まで駆け上がった。万が一に湯澤が取れたとしても、  
打ち込む作戦だ。

取れ湯澤！！

腕、脚、  
目一杯伸ばし

右手のラケットを滑らせ、長く持ち替え、

湯澤はバックハンドで返した

「――！」

「イヤアアアアッ――！！！」

ドサッ

「サービスオーバー 1 2 (ワンツー) ！」

「びっくりした」

悲鳴を上げたのは室我。

湯澤は無言で手について立ち上がった。

ネット前まで上がってきた室我を瞬時に判断して、湯澤はあのわずかな時間で相手側ネット奥まで返した。

前まで来た相手に速い足の長い球を返すことは至難の業。  
まして室我は女。  
このサービスは湯澤が制した。

「くっ…悔しい」

室我はそう言ってシャトルを拾った。

室我はかなり騙しのプレーを上手くやった。  
全く同じフォームからサーブを打った。

「すげ…」

「声出せ湯澤アー!!」

「!」

伊藤が「すげー」と言いかけた所で隣の男が叫んだ。

「お前何でもつと喜ばねえんだよ!! そんなんじゃない、相手によ  
つちやメンタルで負けるぞ!! 負・け・だ!!」

体育館が静まり返る。

「声出せ声!! 出さねえからてめえはポンポンポン点取られる  
!」

「……うす」

湯澤は不満げに返事をし、シャトルを受け取った。

（すげーな…この人座ったまま表情変えずにでけー声出した…）

伊藤はちらつと隣の男を見ながら思ったが

（アレ…?!）

伊藤の視界がぼやける。  
再び、体育館のざわめきが戻ってきた。

…ああ、思い出した。

伊藤は、目の奥から涙が湧いて来るのを感じた。

野球…夏の練習の日…

こんな感じに監督に声出せって怒られて…

「……………」

男は、伊藤を横目で見ていた。

…いや、でも

…野球じゃないんだ、今は

伊藤は目をゴシゴシこすった。

伊藤は笑った。

少年のように、目を輝かせながら

バドミントンって…すっげえドキドキする…！

男は少し笑って湯澤に視線を戻した。

こんなにドキドキすんの…初めてだ…！  
ラリーー球ごとのラケットの音…

パンッ

床を蹴るフットワークの感じ…

パンッ

試合の空気感……！！

パンッ

全部が初めての感覚！！

「あ、ヤバッ」

室我がシャトルを返し損ねた。  
羽球はゆっくりと湯澤のコートの真ん中へ落ちて行く。



ダッ

湯澤は走り、

パンッ

「うあッ?!」

鮮やかに決めた。

「ポイント2 2（ツーオール）」

すげー、すげーよ!!

伊藤は思わずにやけてしまった。

「もっと喜べや湯澤ア!!」

また隣が叫んだ。

「……………」

湯澤は男を無視して、シャトルを受け取る。

多分、あれがあいつの一番やりやすい状況……!!

「ストップ!!」

パンッ

室我さんは下手打ちだけど、湯澤はショートサーブを打つ形からロングショット打ち分けてる!!

パンッ

パンッ

湯澤は室我のスマッシュを取り、長いラリーが幕を開けた。

ゲーセンのバドミントンや……  
学校の授業のバドミントンなんかとは全然違う……！！

これが競技のバドミントンなんだ！！

伊藤は試合に見入った。

蝶のように舞い、蜂のように刺すって……

……まさしくこんな感じじゃなか……！！

伊藤由輝の目の前は光に溢れた。

全てが輝いて見えた。

体中がくすぐったいくらいにウズウズしてくる。

室我さんも、湯澤も、最高にカッケエ！！

パンッ

「ナイシヨー！！」

オレも、こんな風に…

こんな風に二人みたいに…

「イッポン!!」

バドミントンをやりたい!!!!!!

~~~~~

「21 17（トウエンティーワンセブンティーン）ゲーム」

「ありがとうございました」

結果は、僅差で室我の勝ちだった。  
一進一退の攻防。  
なかなかの見応えのある試合となった。

二人は握手し、礼をしてコートから出る。

伊藤は思わず拍手した。

「…アドバイス…お願いしあす」

湯澤と室我は話していた。

伊藤は目の輝きが止まらない。

「そんなに面白かったか」

男が話しかけてきた。

「ハイ！！そりゃーもー！！」

「はは…果たして三年までその気持ちでいられるか…」

「え？？」

男はボソッとそう言うと、こっちに来た湯澤と話し始めた。

「お願いします…」

室我もやって来た。



「あー、君見てたんだー」

「う・うす!!」

室我が伊藤の目の前で立ち止まる。

「男バドかと思ってたー  
入部希望？」

「あ、えと…それは」

「そうかー…」

室我は残念がったが

「入ります!!」

「ホントに?!」

伊藤がそう言っていると嬉しそうに笑った。

「じゃあいつか戦うかも。私が卒業するまでに強くなってるね。  
…私も強くなるから!!」

伊藤は何だかくすぐつたい気持ちになった。

「じゃあ」

「あつ…」

室我は去ってしまった。

しかし、伊藤は

強くなってね…だつて!!

脳内では何度だってリピートされ、響き続ける。  
強くなってね…と。

強くなってやろっじゃん、絶対!!

高一の人生設計変更！！

オレは、三年の引退まで  
バドミントンの青春を費やす！！

よし、決まり！！

伊藤はガッツポーズを決めた

## 入部（前書き）

短い…… ^ ^ ;

こんな話になるはずじゃなかったのに！。

## 入部

『じゃあ、いつか戦うかも。私が卒業するまでに強くなってるね。』  
『私も強くなるから！！』

強くなってやろっじゃん！！

絶対に！！

オレはこの高校生活、バドミントンにかける！！

決まりっ

伊藤由輝は、心の中で、何度も室我の言ったことをリピートしながら決意を固めた。

「せ・先生!!」

若そうな男が伊藤を見た

「オレ、バドミントン部入部します」

「……………」

男は目をそらした

え、何この空気

「あの……」

「……………」

え、何これ何これ

ちよつと何とか言つてよ!?

「あ……あの……ダメっすか」

「……………」

えええええええ？！？！？！

「入りたいなら入ればいい」

「……」

男は静かに言った。

その空気感に、伊藤は圧倒される。

「入るものは拒まない。」

「え…じゃあ」

「出るものも拒まない。」

「！！」

「ただし」

「一度入ったからには、それなりに鍛える」

「お前の精神をスタスタにするような口もきく」

「ケガもさせるかもしれない」



「そしてお前は、きっとオレを嫌いになる。」

「憎くて憎くて仕方がなくなる。それでも上を目指し続けるやつなら、きっと栄光を手にする。」

「やるもやらないもお前が決めることだ。オレは、このチームで上に行きたい。」

「……………」

「というわけだ」

「……………」

男は伊藤をじっと見た

「…入部します」

そう言った時の伊藤は笑っていなかった。

「……男子バドミントンの顧問の山本晃  
(やまもとあきら)だ。」

「一年八組の伊藤由輝です」

「入部届は担任通せ。入るなら明日までに提出。」

「……………ハイッ!!」

これは、人類にとっては何の変哲もない普通の出来事でも、伊藤由輝にとっては大きな第一歩であった。

絶対やってやるぞ…

絶対に…！！

室我さんを倒せるくらいに強くなってやる！！

伊藤由輝は虜になった。

高校生の競技バドミントんに。

……そして、  
そのプレーヤー室我に。

「……お疲れ様です……」

湯澤が男に礼をし、体育館を出て行った。

「あつ……！」

ガララ……キイツ

締めりの悪い扉を開け、伊藤は湯澤を追いかけた

「ねえ……！待てよ」

「……………」

伊藤は声を掛け、湯澤はそれに立ち止まった。

湯澤は、ゆっくりと振り返り、興味なさそうに伊藤を見た。

「湯澤ってゆーんだよね？」

バドいつからやってる？

楽しい？どうやって練習してんの？」

湯澤は伊藤を一瞬上から下まで見た。

伊藤は笑顔だ。

「……………」

「オレ入部することにしたんだ！これからよろしくたのむな！！」

湯澤は小さく息を吸い込んだ

「……つるさい」

「なっ……」

小さく言い切る。

伊藤を振り切り、湯澤は歩いて行った。

「……………」

伊藤は、怒るでもなく、悲しむでもなく、歩き去る湯澤に向かって指差した。

「そのうち、お前がそーやってシカトできねえ位強くなってやっからな！」

分かったか！今のうちに話したいこと考えとけよ、覚悟しろ！」

「……………」

スタスタスタ

シカトされた——！！！！！！

伊藤は微妙にショックを受けたが、湯澤はそのまま歩いて行った。

…いや、これでいい！  
絶対強くなってやるんだから……！！





## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0760ba/>

---

BAD BoyZ バドボーイズ

2012年1月5日21時46分発行